



村松剛

三島由紀夫の世界

新潮社

三島由紀夫の世界

村松剛

新潮社

ISBN4-10-321402-3 C0091

© Takeshi Muramatsu 1990, Printed in Japan

みしまゆきお せかい
三島由紀夫の世界

平成二年九月一〇日発行
平成二年一〇月二五日三刷

著者 村松剛
むらまつ たけし

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

東京都新宿区矢来町七一

電話 業務部(03)二六六―五一一一
編集部(03)二六六―五四一一

郵便番号 一六二一

振替東京四―八〇八

印刷所 大日本印刷株式会社

製本所 株式会社大進堂

価格はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛
お送り下さい。送料小社負担にてお取替えい
たします。

目次

序章——生家

雅びの棘 9

鹿鳴館の香水 28

I 青春——『酸模』から『盗賊』へ

初恋 53

恋の破局 78

失われたものへの復讐 98

II 自己改造をめざして——『假面の告白』から『金閣寺』へ

「假面」の創造 123

救済の拒否 150

肉体美の「神話」 171

「他者」への転生 191

夢想の恋、新しい恋 213

第二の人生 233

Ⅲ 死の栄光——『鏡子の家』から『英霊の聲』へ

「時代」への挑戦 261

死の世界の再現 283

二つの事件——脅迫と告訴 305

「父」殺しと「父」の発見 325

NLTの結成と四部作 348

「優雅」をこえて 373

叛逆の騎士 396

Ⅳ 行動者——『豊饒の海』の完結

「狂気」の翼 421

集団という橋 443

訣別 469

あとがき 505

作品名索引

三島由紀夫の世界

序章

——生家

雅びの棘

1

大久保の裏通りに、立派な門構えの家があった。

——これが橋さんの家よ。

散歩の折りに母親から、子どものころよく教えられたものである。

——開成中学の校長さんだった方ですよ。

あまりたびたび聞かされたので、庭木の鬱蒼と茂るその家のたたずまいがいまも鮮明に記憶に残っている。明治通りと平行に走る小路に、家は面していた。（長い塀は、木造だったように思う。）まえが、平沼騏一郎の邸だった。

古い戸籍だと橋家は東京府下豊多摩郡西大久保四〇八番地で、当方の育った家が三〇八番地だったから、地番は互いに一〇〇番ほど離れている。ただし老母の記憶では、橋家は四〇八に移るまえにも二七〇か八〇のあたりの小さな家に仮住まいしていたという。このあたりはその後の市区改正によって淀橋区——敗戦後は新宿区——に編入され、拙宅は西大久保二丁目の同番地になった。四〇八の橋家の方は、一丁目に変わっていたのではないだろうか。

橋さんの家よといわれても、それとこちらとがどういう関係にあるのか、当時はさっぱりわか

らなかった。橋家の次女の倭文重しずえさんと母とが子どものときからの知合いで、その倭文重さんが平岡という家に嫁ぎ、生まれた子が三島由紀夫であるときかされたのは、ずっとのちのことである。

——若いころの倭文重さんは、それは可愛らしいひとでしたよ、
といまでも老母はことあるごとにくりかえす。

その倭文重さんと母とが昭和八、九年のころ、四谷駅の近くで久しぶりに再会した。外濠の土堤の上を市ヶ谷の方まで歩きながら、若い倭文重さんは嫁ぎさきでの苦勞を綿々と訴え、離婚するつもりでいるといったという。正確な日時は、老母は覚えていない。

倭文重さんは昭和三十年代の末以後も母を含む複数の人びとをまえにして、離婚したいとしきりにいつていた。

——うちの主人は変人。

このころは母も倭文重さんも家庭裁判所の調停委員をつとめ、毎日のように顔をあわせていた。昭和四十年前後のこういう離婚はなしは愚痴まじりの冗談だったとしても、昭和八、九年の倭文重さんの立場は深刻だった。姑の夏子は幼い公威きみたけ（三島）を手許に独占し、母親に会わせようとしない。公威が母の名を口にしただけで、ときには怒り狂う。

夫の粹氏との仲までも姑は嫉妬すると、いま八十二歳になる老母の記憶力を信じるなら、倭文重さんはいったさうである。かといって離婚はこの状況下では、長男公威との訣別を意味する。

三島由紀夫の生家は、四谷永住町二番地にあった。大木戸の市電——のちの都電——の停留所に近く、北がわには陸軍士官学校まえの道路をへだてて成女学園がある。成女学園は、いまでも同じ場処に位置している。

昭和九年に彼の家は信濃町の慶応病院の近くに移転し、祖父母と両親とはこの借家ではべつべつの棟に住んだ。三島はそれまでと同様に祖父母の家にひきとられ、彼の弟妹は両親のもとで暮す。

倭文重さんの離婚の決心と突然のこの転宅とのあいだに、どのような因果関係があったのかはよくわからない。それまでは六人いた女中が転居とともに三人に減らされたと言ジョン・ネイスンはその著書、『三島由紀夫——ある評伝——』に書いていて、引越しの直接の原因は金銭上の窮迫だったのだろう。「私の家は殆ど鼻歌まじりと言ひたいほどの氣樂な速度で」経済的に没落して行つたと、三島は『假面の告白』のなかでしるしている。

とにかく倭文重さんとしてはこのときに結婚いらひはじめて、姑の夏子から独立した世帯をもつことを許された。長男の公威とは依然として別居状態であるとはいへ、生活を二六時中姑の監視下におかれなすむ。引越しが結果として、三島の両親を離婚の危機から救つたことは、たしかなことのように思われる。

さらに数年後の昭和十二年に、三島の一家は渋谷区大山町に移転した。『假面の告白』によると、

「父はこの機に私を自分の一家へ引取らうといふ遅ればせな決心にやつと到達したので、彼が『新派悲劇』と名付けたところの、祖母と私との別離の一場面を経て、父の新たな移轉先へ私も移つた。(中略)祖母は日夜私の寫眞を抱きしめて泣き、一週間に一度私が泊りに來るといふ條約を、私がもし破りでもすれば忽ち發作をおこした。」

十三歳(数え)の私には、「六十歳の深情の戀人がゐたのであつた」という有名な文章が、このあとにつづく。同じ年に梓氏は営林局長として大阪に単身赴任し、倭文重さんはここにはじめ

て母子水入らずの家庭生活を享受できた。

——これが橋さんの家よ、

と母が幼い筆者にくりかえしいったのは、たまたま出会った倭文重さんから離婚の意志をきかされて衝撃をうけ、実家の橋家のまえを通るたびにそのことを思い出したためだったらしい。倭文重さんは母と同じ小学校に在学していたし、その異母兄の橋健行は母の叔父の田部重治（英文学者、随筆家）と親しかったのである。

三島由紀夫が中学の一年生のときから住んだ渋谷大山町の家は、たずねて行ったことはむろんないけれど、いくどか見たことはある。一高（旧制）の裏門を出てすぐの場処であり、学校の寮から裏門を抜けて渋谷に出ようとすれば、自然にそのあたりを通る。

昭和二十三年のころ松濤公園のそばを歩いていたら、知合いの女の編集者に出会った。学校に用事があって来たのかとたずねると、

——いいえ、三島由紀夫さんの家に行くのよ。

そこよ、と赤い屋根瓦の家を指さした。黄色っぽい漆喰の壁の洋館で、横に和風木造の平屋が張出している。洋館の屋根の勾配は極端に大きく、二階の小さな窓の上部にさらに小窓があって、二階屋が三階建のように外からは見える。小さいながらもいかついその洋式の塔に和風の平屋がとりついているのだから、異様な建物という印象をうけた。

三島の書齋は、洋館の二階にあった。なお大山町十五番地のこの家は、いまもむかしのままの姿で残っている。（現在の地番は松濤二丁目四ノ八。）門の表札は剥ぎとられ、ひとが住んでいる気配はない。

大山町の家に移転してから倭文重さんがただちに着手したことは、子どもの学習院からの引揚

げだった。次男の千之氏^{ちゆぎ}は学習院初等科を退学させられ、近くの大向小学校の二年生に編入される。公威は一高に入れたいと、彼女は思っていた。

三島由紀夫が死んだ直後に、倭文重さんはいくつかの愚痴をぼくにいった。そのひとつが、学校のことである。

——学習院の中等科を終るときに、一高を受験させたのですよ。でも学習院程度の学校では、一高は無理だったのね。一高のバンカラ生活を経験していたら、公威もあんなことはしなかったと思うの。

「あんなこと」が自衛隊入りらしい彼の生活をさすことは、いうまでもない。

学習院から一高にはいった例は、近衛文麿がそうであるように少数ながら過去になかったわけではなく、それに一高の生活も外見ほどにはバンカラではない。そうは思ったのだが、このときはだまっていた。

——学習院に入れると決めてしまったのは、義母^{はは}ですからね。

その義母^{はは}の夏子は、昭和十四年に死去している。彼女がいなくなつたからこそ、一高の受験にも踏切れたのだろう。しかしそれも、失敗におわつた。つまり息子を死に向かって突走させた責任の大本は姑にあると、倭文重さんはいいたかったのである。

華族以外の家の子弟が学習院にはいるということは戦前では少く、金持でもない平民となると例外例に属した。(敗戦までの学習院は、宮内省の管轄下にあった。) そのため息子に肩身のせまい思いをさせたと、倭文重さんがいくどもこぼしていたことは母からきいていたし、「足輕扱い」という表現も梓氏の著書『伴・三島由紀夫』に彼女のことばとして出ている。この問題に関

しては弟の千之氏も『兄・三島由紀夫のこと』と題する文章のなかで、

「戦前の学習院であるから、皇族、華族を中心としており、爵位をもたない自分の家に兄はなにかしらのコンプレックスを抱いていた節がある。(中略)ベートーヴェンが平民の出であり、その姓名の中にある『ファン』は貴族の印しの“von”でなく“van”であることを人に嘲われたというエピソードを、同情をこめて私に話したことがあった。」(小説新潮スペシャル)創刊号、昭和五十六年一月)

ただし倭文重さんが思いこんでおられたほどにつよい違和感を、三島自身は学校生活のなかで感じていなかったのではないか。千之氏が例に引くベートーヴェンのはなしにしても、ことばどおりにうけとれば柄に似合わない「華族気どり」と世間から嘲笑されることへの懸念をあらわしてはいても、学校内部での孤立感の表現とはちがうように思う。やはり非華族の出の三島の同級生にたずねてみても、

——差別なんて、そんなに感じませんでしたよ、

という返事だった。

それに何よりも文学上の師や仲間が、三島のまわりには形成されていた。文芸部の先輩である坊城俊民、東文彦、徳川義恭と知合ったのは、中等科初期の時代である。昭和十六年、中等科五年の九月からは、師の清水文雄氏の推挽によって『花ざかりの森』を、彼は「文藝文化」に連載しはじめる。三島由紀夫の名をつかったのはこのときが最初で、連載は十二月までつづいた。

『花ざかりの森』の完結は著者の自註によれば、昭和十六年の初夏となっている。同じ夏の末には『祈りの日記』の執筆にとりかかり、さらに秋にはいつてから『芋菟と瑪耶』という短篇を書きはじめた。ちょうどこの時期に書かれた東文彦宛の三島の書簡が、「新潮」昭和六十三年七月